# A 様の役割に対する認識の変化について
# ～何に楽しみを見出したのか～

16CC02　　泉　耀

## Ⅰ．はじめに

介護実習Ⅲでは、認知症高齢者の日中の過ごし方に着目して取り組みを行った。対象としたA様は、日中いつもやることがなく退屈そうな様子で、楽しみのない時間を淡々と過ごしているようだった。そのような生活が続くことによりQOL の低下、認知症の急激な進行が考えられるため、その防止を目的として、日中の活動を充実させることを目標とした。取り組みの中で、A 様が実習以前から取り組まれている役割への認識に大きな変化が見られたため、「何がどのように作用して認識に変化を与えたのか」についての考察を行った。

## Ⅱ．実習先種別・実習期間

介護老人福祉施設

2017 年 6 月 26 日～7 月 28 日（うち 23 日間）

## Ⅲ．事例紹介

A 様　80 歳代　女性

1.家族構成及び生活暦

息子、娘がそれぞれ 1 人。2 人とも結婚しており、実家を出ている。その後は夫と二人で暮らしていたが、後に夫が他界し、独居生活を始める。

2.入所に到った理由

A 様宅へ新聞の配達に訪れた配達員が、呼び鈴や呼びかけに対して返事がないことを不審に思い家の中を確認、室内で倒れているA 様を発見し救急搬送。搬送された病院で脱水、腎不全に加え認知症を患っていると診断され、独居生活の継続は困難と考えられたため入所。

3.健康状態

食道裂孔ヘルニアを患っている。

4.日常生活の状況

下肢筋力の低下を理由に車椅子を使用しており、フットレストを上げて足底をつき、下肢と車椅子の両方を使用して移動を行う。

5.性格

穏やかな性格。少々遠慮がちな面があり、関係性が強くない相手には曖昧な返事で相槌を打つことが多い。

6.1 日の過ごし方

普段はリビングの自席でのんびりしていることが多い。傾眠状態でいることが非常に多く、開眼中も暇そうにしている。

## Ⅳ．介護の実際

1.課題の発見と分析

A 様の様子を観察する中で、役割である清拭用タオルの整理以外には新聞を読む程度の活動しか行っておらず、いつも暇そうにしていた。役割に対する取り組み方も、どこか沈んだ表情で退屈そうな様子。日中における楽しみがなく、従事している役割については達成感や楽しさを感じられないためにこのような取り組み方をみせるのではないかと考えた。

2.介護上の課題

日中の活動を充実させ、QOL を向上させることを介護上の課題として取り上げた。ここにおける「日中の活動」については、以前から従事している役割の他、A 様が趣味の範疇で行える余暇活動や、他の利用者様との関わりも含めて考案した。

3.介護目標

長期目標：安全に、楽しみを持って生活できる。

短期目標：日中において活動的に過ごすことができる。

## Ⅴ．実施及び結果

7 月 12 日から同月 20 日（うち 7 日間）までの実施期間において役割の提供、そしてそれに関する声かけを重点的に実施。実施開始頃から、役割である清拭用タオルの整理を行う中で笑顔を見せるようになるなどの変化が見られ、実施期間中盤には作業終了後、「もっとやってもいいだに」と明るい表情で作業の続行の意思を見せるなど意欲的な様子がみられた。

## Ⅵ．考察

このように意欲的な様子をみせるなどの大きな変化が見られた一番の要因は、役割を通して生まれた人間関係であると考える。A さんは他者と一緒に役割を行うこと、つまり役割をきっかけに展開されるコミュニケーションに楽しさを見出したからではないだろうか。ねぎらいの言葉をかけられることによって達成感や満足感が生まれる楽しさ、そしてそれを表現する相手がいることもまた、このような楽しさを感じられる要素のひとつであったと考える。A さんには、「役割などを通して認め合う人間関係が欲しい」というニーズがあったのではないだろうか。

原田、谷口ら(1985)[1] は、介護老人福祉施設における利用者の「安楽な死を迎えたい」を除いた多種多様なニーズに対応する援助として、以下の 5 点を述べている。

① 個人が日常生活をするうえで、障害となる疾病や ADL の低下に対しては充分な配慮をし、入所者個人の残存機能の維持、回復の援助をする。

② 老人ホーム内での日常生活の過ごし方の提案として、教養・娯楽のための活動、健康保持のための活動などの諸活動への参加を奨励すること。

③ 入所者間の交流や職員と入所者との接触の機会を多く用意し、相互理解を深めること。

④ 老人ホーム外の親族、友人との接触が容易になるように配慮すること。

⑤ 入所者に有用感をもってもらうために、入所者に適した役割を提供すること。

今回実施した支援はこの中の②・③・⑤にあたる。

今回実施した、日中の活動を充実させることを課題とした支援の中で、③の要素については私（介護者）が仲介を行う形で A 様と他の利用者のコミュニケーションが展開されることによって補完されたが、これが仲介を必要とすることなく、自然な形で A 様と他の利用者同士のコミュニケーションが行われるようになれば、A 様の生活はより楽しく充実し、A 様の持つニーズに応える形となるのではないだろうか。宮島(2016)は、「認知症の人にとっての社会的環境を支えることは、ほかの人との交流を図りやすいような環境の工夫が必要となります。」[2] と述べている。これから先の支援によって、A 様と他の利用者同士が、役割の他にきっかけをもって容易にコミュニケーションを展開できる環境が整えられることで「役割などを通して認め合う人間関係が欲しい」という A 様のニーズに応える支援が実現できるものと考えられる。

## Ⅶ．おわりに

今回の実習を通して、利用者様の QOL に働きかけるためには、ただ余暇活動を提供するだけでなく「利用者様が何を楽しみとするか」といった点についても考えることが必要であると学ぶことができた。これから利用者様と関わっていく中でこの学びを活用し、利用者様に生きがいや楽しさを与えることのできる介護者を目指していきたい。

## 参考・引用文献

1)原田、谷口他　(1985 年)「老人と生きがい」中央法規出版 p.95~96

2)介護福祉士養成講座編集委員会(2016)「新・介護福祉士養成講座 12　認知症の理解　第 3 版」中央法規出版　p.140